

二〇一九年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

— 1 —

次の文章は、患者である千田仙蔵が、看護実習生の瑠美に話をしてしている場面から始まります。これを読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかつこなどもすべて一字に数えます。

今から六十年ほど前、千田仙蔵はまだ小さな子供だったという。母親は都内の病院で看護婦をしていて、一人っ子だった仙蔵は、母親が仕事をしている間、いつもひとりきりで家で留守番をしていた。

「家でおとなしく待つてると言われてたけど、夕方過ぎると不安になって、母親の勤める病院まで迎えに行つたもんだ」
母親のことを思い出しているのか、小さかった自分を懐かしんでいるのか、記憶の焦点を合わせるかのように目を細めて千田は言った。

花房チヨは、母親の同僚だった。だが同僚といっても母親よりはずっと若く、今から思えば二十歳になっていたかどうか……。若いチヨは仙蔵が病院にふらりと訪れても、厳しく咎めたりは決してしなかったと千田は微笑んだ。

「学生さん、昔の手術ってどんなだか知ってるか。アンプタっていう切開手術ではなあ、看護婦が骨の切り口に蠟を入れて縫い合わせるってな介助をするんだ。その介助は熟練した看護婦にしかできないんだ。おれの母親は手先が器用だったからしよっちゅう手術の介助をやらされてた」

小さな子供が自分の母親を自慢する時のような口調で、千田が言った。

まだ新米のチヨは、ブリキのバケツを両方の手にさげて手術室や病室を温める練炭を運んだり、患者の糞尿を埋めるための穴を院庭に掘る下働きばかりしていた。当時、結核の感染を恐れた農家が便所の汲み取りに来なくなったために、看護婦が自ら患者の糞尿の始末をしなくてはならなかったのだと千田は言った。

「その、穴掘り作業と氷枕を作るための氷砕作業が、冬の夜勤ではもつとも辛い業務だつてチヨさんは言つてたな」
冬の寒さで血の気の失せた顔を美しく見せるために、チヨら若い看護婦はマキキュロの入った小瓶に小指を入れて、自らの頬や唇

に塗りつけていた。その仕草を、自分は今でも忘れられないと千田は微笑む。

「マーキユロって？」

「*赤チン、知らねえか？」

蒼ざめた肌あおに浮かぶ赤チンの朱色しゅいろは、本物の口紅よりずっときれいだっただけという。母親の仕事が終わるのを詰め所で待っている間、忙いそがしく動く看護婦たちの働く姿を眺ながめているのが好きだった。

「そのうち戦争が……起こってな。チヨさんと一緒に病棟びょうどうの窓ガラスにへばりついて、焼夷弾しょういだんが空から降るのを見ていたこともあるよ」

③ 窓ガラスからはまだ距離きょりのある空で、次々に落下していく光を指差しながら、「あれは日本軍だろうか、アメリカ軍か……」と眺めていた。光が波を打って照らし出されて、子供だった仙蔵の目には花火④みたいに映った。

「チヨさんと最後に会ったのは、あと少しで戦争が終わるはずの春の日だった。母親が病院船に乗り込んで外地に行くことになってな。その見送りにチヨさんも来たんだ」

母親が病院船に乗り込む日、チヨは大きな腹を揺らしながら、仙蔵とともに見送りにやってきた。

「ごめんねっておれに謝りながら、チヨさんは手を振ふってた。おれの母親が、顔からはみ出すほどの笑顔⑤を浮かべて船からこっちに手を振ってんだ、それに答えてチヨさんも、ちぎれるくらいの速さで手を振り返してた。おれは……ずっと俯うつむいたまま、かあちゃん顔もちゃんと見られないで泣いてんだ」

本来なら、その病院船に乗るのはチヨのはずだった。だが妊婦にんぶを外地に送るわけにはいかないと、母親が任務交代を申し出たのだ。仙蔵は母親に「行かないでほしい」と懇願こんがんした。頼たのむから行かないでくれと。

「母親がいる時もない時も毎日泣いたな。男がめそめそするもんじゃないと叱しかられても、それでも泣いたよ。母親が好きだったんだ。そばにいてほしかった。母親がいなくなれば自分も生きてはいけなと思ってた……」

おまえが行けよ、とチヨに向かって叫んだ。おまえが船に乗っていけよ、チヨちゃんがお母ちゃんの代わりに行ってくれよ、と。

「母親を乗せた病院船が启航する時、海側から強い風が吹いてきてな……涙がこう……後ろに流れたんだ。母親がおれのことを見てるのを痛いほど感じたよ。船体が眩しいくらいにまっ白で、空にかかる雲みたいだった」

⑥そして目の前の雲は、仙蔵の知らないどこか遠くへ行ってしまった。まっ白な船体の真ん中に引かれた青い帯に、赤十字の鮮やかな印に、仙蔵は母親の無事を祈った。母親が無事に帰ってきてくれるのであれば、自分の命はいらないと本気で思ったのだと、千田は言った。

「母親ともチヨさんとも、それが最後の別れだったよ……数ヶ月後に、母親の乗った船が海に沈んだことを疎開先の親戚の家で知ったんだ」

千田は、気管を絞るような咳をしながら言った。

「花房チヨさんとは、その後会わなかったんですか？」

千田の黄色く濁った目を見ながら、瑠美は訊いた。

「会ってない。会いたくなかったんだ……あの人が幸せになっていたら許せないって思ってた。そんなふうにしてたらあつという間に半世紀過ぎちまったよ」

チヨからは何度か手紙が届いたけれど、それらはすべて読まずに捨てたのだと千田は顔を歪めた。

「頼まれてくれるか？ おれが死んだら手紙を佑太に渡してくれるか？」

わざと視線を合わせないようにして話をしていた千田が、体の向きを変え、瑠美の目を見る。

そう言う千田の顔からはいつものふてぶてしい表情は消え落ち、老いを隠さない笑みがあった。

注 *赤チン……消毒液の一種。赤褐色をしていることから「赤チン」と呼ばれた。

*佑太……仙蔵の孫。仙蔵はチヨへの手紙を瑠美に預け、瑠美から佑太に届けてもらいたいと頼んだ。

瑠美に長い話をして疲れてしまったのか、千田はそれからずっと、ベッドで眠りっぱなしだった。瑠美はナースステーションに戻り、空いたスペースで千田のカルテや看護日誌を読むことにした。椅子に座り、分厚い名著を読み始める時の真摯な気持ちで、千田仙蔵と書かれたカルテを捲った。

五時過ぎに病棟から学校に戻ると、瑠美は疲労でしばらく着替えることもできず、更衣室の端っこにぺたりと座りこんだ。目を閉じるとこめかみの辺りが疼いているのがわかる。

「お疲れっ」

頭を軽く叩かれ、ゆっくりと顔を上げると目の前に白いストッキングに包まれた遅い脚があった。

「ずいぶん疲れた様子だね」

頭の上から降り注ぐ千夏の声に、瑠美は無言で笑ってみせた。

「大変だったの、今日？」

千夏は瑠美のすぐ隣に腰を下ろすと、体育座りをして膝を抱えた。ユニホームのフレアスカートが大きなパラソルのように広がる。

「大変……っていうのでもないけど。なんか疲れた」

瑠美が大きく息をつくくと、千夏が肩を揉んでくれた。千夏の大きな手が肩の筋肉をつかむたびに瑠美の頭が揺れる。

瑠美は千夏に、千田に頼まれた手紙の話をした。本当は自分の受け持ち患者の情報を、たとえ同じ看護学生にでもしてはならないという規則があるのだけれど、そんなものを守る学生などほとんどいない。患者という他人と正面から向き合わなくてはならない実習で、学生たちはかけがえのないものを得るが、それと同時にたくさんの苦しみとも出合わなくてはならない。病床にある人と、学生という身分で関わりあっていく難しさというのは、実習を経験した者にしかわからないと、瑠美は思う。自分が資格を持った看護師であれば、患者の力になることもできるけれど、学生という身分では患者からもらうばかりで、自分は何ひとつ返すことができず、それがまた苦しいのだった。

⑪ 「でもよかったね」

右肘を瑠美の頬の付け根にあてがい指圧しながら千夏が言った。

「よかったって、なにが」

「ほら、瑠美、初めはものすごく嫌ってたじゃん、患者さんのこと。なのに今はすっかり仲良くなっちゃって」

「別に仲良くなっていけど」

「だってそんなに大切な手紙を瑠美に預けるんでしょう。それってすごいことだよ。信用してるってことだよ、瑠美のことを」

千夏は言う、今度は左の肘を頸の付け根にあてがう。

「千田さんが私のことをどう思ってるかはわからないけれど、確かに私の気持ちは変わったかも。相変わらず口の悪い人だけど」

初めて会って挨拶をした日、看護師に悪態をついていた千田の、歪んだ唇を思い出す。彼の態度は今もそう変わらないのだけれど、瑠美は千田のことをそれほど嫌いではなくなっていた。

「ねえ瑠美、人の好き嫌いってなんだと思う？ 特別に自分に何かされたわけじゃないのにどこか X 人がいたり、逆に親切にされたわけじゃないのに好きだと思う人がいたり。そういうのなんでだと思う？」

「好き嫌い、ねえ……」

「あたしはそのことばかり考えてた時期があつて、あたしなりの答えがあるんだ。それはね、12 生きる姿勢なんだと思うんだ。その人の生きる姿勢が好きか嫌いか。それがその人を好きになるか嫌いになるかなんだよ」

千夏は確信めいた口調で言うと、

「千田さんってきつと、しっかりと生きてきた人なんだと思うな。瑠美が親切にしたいと思うくらいだから。……13 あたしは、瑠美のことが好きだけどね」

と笑った。

「なにそれ。あんたにコクられても意味ないんですけど」

千夏のまっすぐな口調に照れて、茶化すように瑠美は言くと、

「そろそろ着替える、ロッカー閉まっちゃうから」

と言ってゆつくりと立ち上がった。気がつけば騒がしかったロッカー室がずいぶん静かになっていた。

汗と甘ったるい匂いが混在する部屋で千夏と並んで着替えながら、瑠美は「肩こりが少し楽になった」と眩つぶやくく。

学校を出ると春の夕暮れが目の前に迫せまっていた。夕焼けのオレンジ色が雲にうつり、「オレンジ色のわたがしみたい」と千夏が言った。

二人で空を見上げていると、頸の後ろ側にじんわりと疲労が上がってくる感じがあったけれど、辛いというより今日一日よく働いたという痛みだった。

（藤岡陽子『いつまでも白い羽根』）

注 *コクられても……告白されても。

問一 —— 線①「記憶の焦点きおくしよくてんを合わせるかのよう」から読み取れる仙蔵の様子としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 記憶が次第におぼろげになり、自分に残された時間のわずかであることにあせりを感じている様子。
- 2 幼い頃こころの思い出が次々に心に浮かび、瑠美に語りつくせないほどであることにとまどっている様子。
- 3 遠い記憶をたどり、ある一時期の自分の思い出を正確によみがえらせ瑠美に伝えようと集中する様子。
- 4 瑠美を説得するために、うすれゆく過去の記憶を一つでも多く明らかにしようと一生懸命いっしょうけんめいな様子。

問二 —— 線②「熟練した」と反対の意味を表す言葉を、同じページの文中から三字でぬき出しなさい。

問三 —— 線③「窓ガラスからはまだ距離きょりのある空」……線④「花火みたいに映った」という表現から、仙蔵のどのような様子が読み取れますか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 戦争という緊迫きんぱくした状況であることが現実のこととして実感できず、どこか他人事のように眺めている様子。
- 2 国同士の争いに巻き込まれたことを悲しみながらも、目の前でくり広げられる光景に心を奪うばわれている様子。
- 3 日本軍とアメリカ軍の激しい空中戦を想像し、何とか日本軍が優位に立ってほしいと空に祈っている様子。
- 4 遠くに落下する光の正体についてはわからないが、不吉なことが始まる予兆ととらえておびえている様子。

問四 —— 線⑤ 「顔からはみ出すほどの笑顔」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「顔からはみ出すほどの笑顔」とはどのような笑顔ですか。もつとも適当なものを次の1～4から選び、番号で答えなさい。

- 1 戦争の最前線である外地への長い船旅を前にした、引きつるような笑顔。
 - 2 普段の仕事ぶりを認められた人にふさわしい、自信に満ちあふれた笑顔。
 - 3 見送る人達に対して努めて明るくふるまおうとしている、大げさな笑顔。
 - 4 盛大に送られることに気はずかしさを感じている、はにかむような笑顔。
- (2) この笑顔から読み取れる、仙蔵とチヨに対する仙蔵の母親の気持ちを三十字以上四十字以内で書きなさい。

問五 —— 線⑥ 「そして目の前の雲は、仙蔵の知らないどこか遠くへ行ってしまった」という表現の説明としてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 船を雲にたとえ、仙蔵の幼さと、母が外地に行った事情やその目的を知らされていなかったことを示している。
- 2 船を雲にたとえ、仙蔵が何も心配せず、おおらかな気持ちで事態を楽観的にとらえていたことを感じさせている。
- 3 船を雲にたとえ、出航するときに強い風が吹いてきたと表現することで、母の去り際のあわてた様子を表している。
- 4 船を雲にたとえ、それがどこか遠くへ行ってしまったと表現することで、遠回しに母の死をにわかせている。

問六 —— 線⑦ 「すべて読まずに捨てた」のは、仙蔵にチヨへのどのような気持ちがあるからですか。「く気持ち。」に続くように、三十五字以上四十字以内で書きなさい。

問七 —— 線⑧ 「ベッドで眠りっぱなし」というのは、仙蔵のどのような様子を表していますか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 かたくなだった心がだんだんとほぐれ、周囲を警戒せずに話ができるようになったことに安心している。
- 2 入院してから誰とも会うことがなく退屈していたので、久しぶりに人と話をしたことで興奮がおさえきれない。
- 3 話が長かったからだけでなく、心に深く沈んでいた長年の悲しみや苦しみを言葉にしたことで、どっと疲れている。
- 4 見ず知らずの他人に自分の抱えてきた悲しみや苦しみを安易に打ち明けたことを後悔し、はずかしさで起きられない。

問八 —— 線⑨ 「分厚い名著を読み始める時の真摯な気持ちで、千田仙蔵と書かれたカルテを捲った」とありますが、このときの瑠美の様子としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 仙蔵から話を聞いて心を動かされ、病状を把握するためのカルテや日誌ではあるが、それをきちんと読むことによって仙蔵の人生に向き合い、依頼されたことについても真剣に考えようとしている。
- 2 病室で仙蔵と話をすることで数奇な運命をたどる人間の一生に興味をもち、病状を記録したカルテをさらに深く読み込むことで人間や人体についての理解をいっそう深めようとしている。
- 3 幼い頃の仙蔵の話は戦争など現代からはかけ離れたものであって到底理解ができないので、カルテを見直すことで今までに見落しがないかを確認し、仙蔵の心に寄り添おうとしている。
- 4 仙蔵から託された願いは看護学生の職分を越えていて実行してよいのか判断に迷うので、自分の決定を揺るぎないものにするために参考になるものは全て利用しようと考えている。

問九 ——線⑩「そんなものを守る学生などほとんどいない」のはなぜですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 患者という他人と、正面から向き合わなくてはならない実習で、人との真剣なかかわりを通して得られるものすばらしさを、心に秘めておけないから。
- 2 患者と関わり、たくさんの苦しみと出合わなくてはならない上に、何一つ相手の役に立てない無力感を、一人ではかかえきれないから。
- 3 病床にある人と、学生という身分で関わり合っていくのは難しく、仕事上の問題を仲間とおたがいに励まし合わなければ成長できないから。
- 4 看護師の資格を持たない学生という身分では、患者から貴重な経験をもらえばかりなので、そのうれしさを多くの仲間と共有したくなるから。

問十 仙蔵のチヨに対する気持ちとして**あてはまらないもの**を次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 幼いころから常に自分の幸せを妨げる人として何となく抵抗をおぼえていた。
- 2 自分の家族と同じような親愛の情を抱くまでは至らないが好感を持っていた。
- 3 母親の病院にいつ訪ねて行っても受け入れてもらえるという安心感があった。
- 4 寒い中で重労働を強いられることもあるところには同情する気持ちがあった。

問十一 仙蔵の母に対する気持ちとして適当なものを次の1～6から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1 実の子である自分よりも仕事に夢中で、自分を置いて外地に行ってしまったことをうらめしく思っていた。
- 2 だれよりも慕い、一人取り残されたら自分は生きていけないのではないかと不安を感じていた。
- 3 医師に劣らぬ技術を持ち、手術に追われる看護婦としての姿を見て、近寄りがたさを感じていた。
- 4 看護婦としての高い技術を身につけ、周囲に評価されていることをとても誇らしく思っていた。
- 5 幼い頃にはなればなれになったために、今でもどこかで生きているのだと心の片隅で信じていた。
- 6 看護学生を見ていると母のことを常に考えてしまうほど、母親としてよりも看護婦としての印象が強い。

問十二 ———線⑩「でもよかったね」と千夏が言ったのはなぜですか。次の文の□にあてはまるように、「手紙」という言葉を用いて具体的に二十字以上三十字以内で書きなさい。

千夏は、

と思ったから。

問十三 ~~~~~線⑪「悪態について」とはどのような意味ですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 暴力をふるって
- 2 にくまれ口をきいて
- 3 興奮状態になって
- 4 ひどく腹を立てて

問十四 □Xにあてはまる言葉としてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 いけすかない
- 2 おぼつかない
- 3 やるせない
- 4 あどけない

問十五 ——線⑫「生きる姿勢なんだ」——線⑬「あたしは、瑠美のことが好きだけどね」について、千夏は仙蔵と瑠美をどのようにとらえていますか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 千夏は、生きる姿勢はさまざまでその姿勢に対して好意がもてるかどうかも人それぞれなので、仙蔵が瑠美に対して抱いた好意と自分が瑠美に抱く好意とは違^{ちが}うと思^{おも}っている。

2 仙蔵も瑠美も共にしつかりと人生を歩んでできるととらえており、千夏は死期の近い患者にさえ好意を持たれ頼られている。瑠美の生きる姿勢を好ましいと感じている。

3 仙蔵が瑠美に思いを託^{たく}し、瑠美が仙蔵に親切にしようとしているのは、おたがいの生きる姿勢を認めているからだと考えており、千夏は瑠美の生きる姿勢に対して好感をもっている。

4 瑠美が仙蔵に親切にしようとするのを千夏は仙蔵の生きる姿勢を瑠美が好きだからだととらえており、悪態をつく仙蔵に対しても以前からずつと優しい瑠美に好意をもっている。

問十六 ——線⑭「肩こりが少し楽になった」とありますが、このときの瑠美の気持ちとしてもつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 看護実習で仕事の大変さを初めて実感して気持ちがいっていたが、千夏に肩を揉んでもらって元気が出た。

2 仙蔵の母の話聞き、看護という仕事に命がけであることにおびえたが、千夏の明るさに意欲を取りもどせた。

3 仙蔵はふてぶてしい態度であったので敬遠していたが、その過去や内面を知り、親しみの気持ちを抱き始めた。

4 仙蔵からの依頼は荷が重く不安も感じていたが、千夏に話して肩を揉んでもらったことで心が軽くなった。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

人気グループであるS M A Pのヒット曲「世界に一つだけの花」に、こんな歌詞がある。

ナンバー1にならなくてもいい

もともと特別なナンバー1

この歌詞は、二つのことを考えさせる。

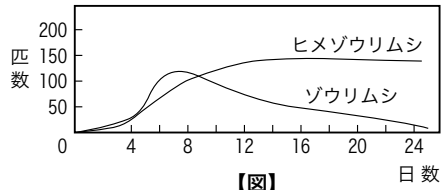
一つは、歌詞のとおり、ナンバー1が大切という見方である。

世の中は競争社会である。しかし、何もナンバー1にだけ価値があるわけではない。私たち一人一人は特別な個性ある存在なのだから、それで良いのではないか、という意見である。

一方、別の見方もある。世の中が競争社会だとすれば、やはりナンバー1を目指さなければ意味がない。ナンバー1で良いと満足してはいけけないのではないか、という考えである。

ナンバー1か、それともナンバー1か。あなたは、どちらの考えに賛同されるだろうか？

じつは、この歌詞は、「弱者の戦略」にとって示唆的しきやくてきである。生物の生存戦略は、この歌詞に対して明確な答えを持っているのである。



じつは、生物の世界の法則では、ナンバー1しか生きられないとされている。それを表したのはガウゼの実験と
呼ばれるものである【図】。

ソ連の生態学者であるゲオルギー・ガウゼは、ゾウリムシとヒメゾウリムシという二種類のゾウリムシを一つの水槽でいっしょに飼う実験を行った。すると、水やエサが豊富にあるにもかかわらず、最終的に一種類だけが生き残り、もう一種類のゾウリムシは駆逐されて、滅んでしまうことを発見した。

こうして、強い者が生き残り、弱い者は滅んでしまう。つまり、二種類のゾウリムシは生き残りを懸けて激しく競い合い、共存することができないのである。勝者が勝ち残り、敗者は去りゆくのみなのだ。

こうした競争があらゆる生き物の間でくり広げられ、その結果ナンバー1しか生きられない。これが厳しい掟である。

自然界でナンバー2はあり得ない。ナンバー2を気取っていても、結局のところナンバー2は、滅びゆく弱者なのである。

しかし、自然界を見渡せば、多種多様な生き物が暮らしている、ナンバー1しか生きられないはずなのに、どのようにして多くの生物が共存しているのだろうか？

ガウゼの実験には続きがある。

ゾウリムシの種類を変えて、ゾウリムシとミドリゾウリムシで同じ実験をしてみると、二種類のゾウリムシは一つの水槽の中で共存したのである。

どうして、この実験では二種類のゾウリムシが共存しえたのだろうか。

じつは、ゾウリムシとミドリゾウリムシは、棲む場所とエサが異なるのである。ゾウリムシは、水槽の上の方において、浮いている大腸菌をエサにしている。一方、ミドリゾウリムシは水槽の底の方において、酵母菌をエサにしている。

このように、同じ水槽の中でも、棲んでいる世界が異なれば、競い合う必要もなく共存することが可能なのである。これが生態学の分野で「棲み分け」と呼ばれるものである。

つまり、同じような環境に暮らす生物どうしは、激しく競争し、ナンバー1しか生き残ることができない。しかし暮らす環境が異なれば、共存することができるのである。

そのため、自然界に存在している生物は、他の生物と少しずつ生息環境をずらしながら、自分の居場所を作っている。つまり、「ずらす戦略」は、ナンバー1以外のすべての生物にとって不可欠なのである。

すべての生物は少しずつ居場所をずらしている。

しかし、自然界を見れば同じ場所にさまざまな生き物が暮らしているように見える。本当に、すべての生物が居場所をずらしているのだろうか。

じつは、「ずらす戦略」は単に場所だけの話ではない。場所が同じであっても、生活時間やライフスタイルをずらせば、共存することが可能である。

たとえば、アフリカのサバンナを考えてみよう。サバンナには、さまざまな草食動物がいる。

シマウマは草原の草を食べている。一方キリンは、地面に生える草ではなく、高いところにある木の葉を食べている。つまり、シマウマとキリンは、同じサバンナの草原にいるが、争わないようにエサ場を分けているのである。

しかし、草原の草を食べる動物は、シマウマの他にもいる。たとえば、ヌーやトムソンガゼルはどうだろうか。じつは、これらの動物もエサを少しずつずらしている。

ウマの仲間のシマウマは、草の先端を食べる。次にウシの仲間のヌーは、その下の草の茎や葉を食べる。そして、シカの仲間のトムソンガゼルは地面に近い背丈の低い部分を食べている。こうして、同じサバンナの草食動物も、食べる部分をずらして、棲み分け

ているのである。

また、サバンナには、シロサイとクロサイという二種類のサイがいる。同じように見える二種類のサイもちゃんと棲み分けをしている。

シロサイは幅広い口をしていて、地面に近い背の低い草を食べている。一方、クロサイはつぼんだ口をしていて、背の高い草を食べている。ゾウリムシがそうであったように、サイもまた、こうしてエサをずらしているのである。

このように、場所やエサをずらしながら、共存する「棲み分け」^③は、生態学者の故・今西錦司博士が、カゲロウの幼虫が川の流れの急なところと流れのなだらかなところで、種類が異なることから発見した現象である。

ダーウィンは生物が生存競争の結果、進化を遂げるといって進化論を展開したのに対して、この棲み分け理論は、当初、生物社会は競争をするのではなく、平和共存をしていると説明していた。しかし最近では、激しい競争の結果として、棲み分けが起こっていると考えられている。

いずれにしても競争だけでは、ナンバー1しか生き残れない。競争を **X** ことが弱者が生き残る道であることを自然界の棲み分けは示しているのである。

この世に存在している生物はそれがどんなにつまらなく見える生き物であったとしてもそれぞれの居場所で、ナンバー1なのである。

もし同じ居場所に棲む生物がいたとすると、激しい競争が起こるため、自然界に存在しているすべての生き物にとって、自分の居場所は自分だけのものとなっているはずである。つまりすべての生物がオンリー1でもあるのである。

ナンバー1であることが大事なのか？ オンリー1であることが大事なのか？ この答えはもうおわかりだろう。

既に述べたように、すべての生物はオンリー1である。しかし、ナンバー1でなければ生存できないという鉄則もある。つまり、

すべての生物は、どんなに小さくともナンバー1になれるオンリー1の場所を持っているのである。

オンリー1というのは個性のことではない。その個性を最大限に活かしてナンバー1になることのできる「ポジション」のことなのである。もつともS M A Pが歌う「世界に一つだけの花」は、「花屋の店先に並んだいろんな花」である。人間が世話をしてくれる花屋の花であるなら、ナンバー1でなくとも、オンリー1であればそれでいい。

しかし、自然界であれば、ナンバー1になれる場所を見出さなければ生存することはできない。オンリー1とは、自分が見出した自分のポジションのことなのである。

どんなに小さくとも、ナンバー1を勝ち取った生物が、この自然界を埋め尽くしている。世界のどこかの場所で、すべての生物はナンバー1なのである。

前章では、強者に対して、場所や時間を「ずらす」戦略を紹介した。しかし、「ずらす」ということは、ただ強者を避けるということではない。

「ずらす」ということは、他の生物がナンバー1になれない場所を探し、自らがナンバー1になる自分の居場所を「探す」ことである。そしてどんなに小さい場所であっても、ナンバー1になる秀でた能力を持たなければならないのである。

(稲垣栄洋『弱者の戦略』)

問一 ～～～～線ア「駆逐されて」・～～～～線イ「不可欠」の意味としてもっとも適当なものを次の1～4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア 「駆逐されて」

1 捕食ほしょくされて

2 回避かいひされて

3 排除はいじょされて

4 解放されて

イ 「不可欠」

1 なくてはならない

2 逃れられない

3 有意義だ

4 当然である

問二 ガウゼの一つ目の実験の内容とその結果を、**【図】**も参考にしながら具体的に四十字以上五十字以内で書きなさい。

問三 ——線①「二種類のゾウリムシは一つの水槽の中で共存したのである」とありますが、それはなぜですか。次の文の

A

・ B

にあてはまる言葉を

A

は十一字、

B

は六字で文中からそれぞれぬき出しなさい。

二種類のゾウリムシは A のので、 B もなく共存することが可能だから。

問四 ——線②「棲み分け」とありますが、文中で述べられている「棲み分け」の例としてあてはまらないものを次の1～6から

二つ選び、番号で答えなさい。

1 シマウマとトムソングゼル

2 シロサイとクロサイ

3 ヌーとシマウマ

4 トムソングゼルとサイ

5 トムソングゼルとヌー

6 ミドリゾウリムシとヒメゾウリムシ

問五 ——線③「共存する「棲み分け」とありますが、「棲み分け」についての現在の考え方としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 生き残るための競争が次々と起こってしまうのを少しでも減らすために、あらかじめ食物の異なる生物どうしが集まって棲み分けしていると考えられている。
- 2 生物どうしが激しい競争をした結果、生き残ったわずかな生物だけが、何の争いもなくのんびりと同じ空間で棲み分けをしていると考えられている。
- 3 激しい競争をすることで、生物が強者と弱者とに分類され、むだな争いが起こらないように整然と計画された棲み分けがなされていると考えられている。
- 4 生物の社会では競争をするのではなく、たがいに棲み分けしているとかつては考えられていたが、今は棲み分けも激しい競争のもたらしたものと考えられている。

問六

X にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 利用する
- 2 こわがらない
- 3 避ける
- 4 受け入れない

問七 ——線④「すべての生物はナンバー1なのである」とはどういうことですか。次の1～4からもっとも適当なものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 生存競争を勝ちぬいた結果、自分の能力や特性が他の生物の能力や特性よりも優位に立てるようになったということ。
- 2 他と競争する必要のない場を見つけることにより、自分の能力や特性が発揮され最も優位に立つようになるということ。
- 3 他の生物にはない、自分だけの能力や特性を身につけられたのは失敗をくり返しながらも成長した結果であるということ。
- 4 生物は多様で、苦勞して探さなくても自分の最も秀でた能力や特性がそれぞれに必ず備わっているはずだということ。

問八 あなたはこれから文中の「戦略」にしたがって新しいお店を開くものとします。その際、どのような種類のお店をどのように展開していくのがよいか、具体的な業種を挙げて、あなたなりの考えを九十字以上百字以内で書きなさい。



次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 ニユウシがぬける。
- 2 犬がアバれる。
- 3 久しぶりにコキヨウに帰る。
- 4 昆虫サイシユウをする。
- 5 音楽の才能を育む。
- 6 セーターを洗ったら縮んだ。

問題は以上です

